

天遊 TenYou

大阪教育大学広報誌

OSAKA KYOIKU UNIVERSITY
PUBLIC INFORMATION MAGAZINE

Winter 2021 Vol.55



STUDENTS NOW!

授業探訪

ラボ訪問

BAGの中身

附属学校園ウォッチ

ゼミ室こぼれ話

TOPICS

特集1 学生SNAP with コロナ

特集2 防災特集 もしも、のときに強い大学に!



YouTube OKU Channel

インタビューやイベントの様子など動画を随時更新中!
チャンネル登録してね!



国立大学法人
大阪教育大学

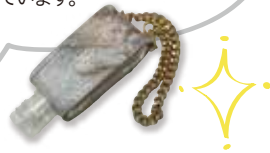
学生 students SNAP with コロナ

Q.with コロナの必需品や増えた荷物は？

ー新型コロナウイルス感染症の影響で変わってしまったキャンパスライフ。学生たちが持っているwithコロナアイテムについて聞いてみました。

A ミニ手指消毒液

キャンパス内にもたくさん置いてありますが、使いたいときに使えるように持っています。



河合 真奈穂さん
国語教育コース
[4回生]

内藤 源一郎さん
スポーツ科学専攻
[2回生]

A モバイルバッテリー

スマホでオンライン授業を受講していたら、すぐに充電が無くなるので、常に持っています。



川島 渉平さん
スポーツ科学専攻
[3回生]

田林 健さん
理科教育コース
[3回生]

A ハンドクリーム

コロナ禍前から持ち歩いていますが、より必要になりました。POPは剥がさないのがこだわります。(田林)



A 予備のマスク・マスクケース

何があるかわからないので、いつも何枚か予備で持っています。



前田 悠太さん
多文化リテラシーコース
[3回生]

A メイク直し用のミストとパウダー

肌が弱く、マスクで荒れてしまうので、特にミストは欠かさず持ち歩いています。



倉盛 隆佑さん
保健体育コース
[3回生]

前田 菜緒さん
養護教諭養成課程
[2回生]

A 上質な文房具

外出することが減り、その代わりに上質な文房具を購入して使うことで、勉強へのモチベーションを上げています。



廣岡 力さん
理科教育コース
[4回生]

A 除菌シート

街中で配っているものも積極的にもらうようにして、いつも持ち歩いています。



岡崎 梨々花さん
音楽表現コース
[3回生]

A マスクケース・ハンドクリーム・ハンドジェル

ハンドクリームとハンドジェルは、コロナ禍ならではの友人からの贈り物です。



福永 歩可さん
音楽表現コース
[3回生]

A 化粧直し道具

マスクで化粧が取れてしまうので、以前より多めに持つようになりました。



石川 明日菜さん
音楽教育コース
[4回生]

A 充電器

以前は荷物になるのでPCしか持ち歩きませんでしたが、キャンパス内でのオンライン授業も増えた今は必ず持ってきます。



金石 実桜さん
幼児教育専攻
[3回生]

A 除菌シート

普段は、ケースに詰め替える大容量のものを持ち歩いています。安いのので(笑)



堀口 裕暉さん
音楽表現コース
[2回生]

A 予備のマスク・ハンドジェル・モバイルバッテリー

以前はピンク色が好きだったので、その名残でピンク色の持ち物が多いです。



佐藤 わかなさん
社会科教育コース
[1回生]

訓練

もしも…のとき

構成員を危険から守るため、また被災した際により早く通常の教育研究活動を再開するため、訓練・研修を実施しています。

防災訓練

震度6強の地震発生を想定した防災訓練を、年に1度実施しています。災害対策本部の立ち上げ、通報、避難誘導、救出救護訓練など、有事の際に慌てず行動ができるように備えています。



※平常時は学生・教員も対象としていますが、コロナ禍においてはe-learningを実施。



例年同日、柏原キャンパス学生宿舎・留学生宿舎の学生を対象とした防災訓練も実施しています。水消火器、屋内消火栓、避難はしご、緊急放送機器の使用訓練などを行い、有事の際に備えています。

BCP研修

危機発生時の被害を最小限にし、教育研究活動を速やかに再開するために作成している事業継続計画(BCP)の改善を図るため、年に1度「BCP研修」を実施しています。

これまで「コロナ罹患者発生」や「大規模な地震発生」などの危機にどのように対応するか、各担当部署で議論した内容をオンライン上で発表しました。



防災特集

もしも、のときに強い大学に!

本学が「もしも」の危機を想定し取り組んでいる事業を紹介します

災害時備蓄品



柏原キャンパス、天王寺キャンパス、11附属学校園では、災害による公共交通機関不通などで帰宅困難となってしまう児童・生徒、学生、教職員等に対し、食事と飲料水を配給できるように、災害時備蓄品の整備を進めています。

マンホールトイレ

柏原キャンパスには、停電時にもトイレが利用できるように、計14個のマンホールトイレ用のマンホールを整備しています。



AED



AED(自動体外式除細動器)を、柏原キャンパスに12台、天王寺キャンパスに4台設置しています。また、平常時はベンチとして、有事の際は担架としても使用できる「レスキューベンチ」も設置しています。

防災パーゴラ

柏原キャンパスには、平常時は休憩場所として、災害時はマンホールトイレ用のテントとして活用できる「防災パーゴラ」を、2基設置しています。



もしも…のとき

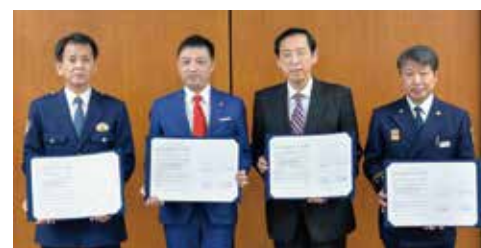
もしも、のときに備えて、キャンパス内にはAEDなどの応急処置に必要な設備や、災害時備蓄品などを整備しています。

もしも…のとき

所在地の被災情報を収集でき、かつキャンパス内に市の災害対策本部が設置される地域公的機関との協定を締結しています。

柏原市・大阪府柏原警察署・柏原羽曳野藤井寺消防組合との四者協定

柏原市・大阪府柏原警察署・柏原羽曳野藤井寺消防組合と、「災害時における大学施設(柏原キャンパス)の一時使用に関する協定」を締結しています。平時から、ドクターヘリの離着陸ポイントを設置し、また防災対策の情報共有を行うなど、地域と相互に協力できる体制を構築しています。

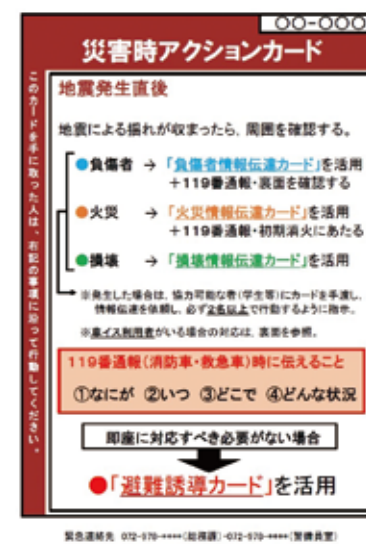


OKU Channelはこちら



アクションカード

授業中に大規模な地震が発生した際に、教職員が学生を屋外に避難誘導することを想定し、誰もが緊急時に必要な対応を迅速にできるための「地震発生時の避難誘導を支援するアクションカード」を、各講義室や一部の研究室の出入口に設置しています。



安否確認システム「ANPIC」

大規模災害等の危機発生時における安否確認を迅速かつ確実に実施するため、「大阪教育大学安否確認システム「ANPIC」」を導入しています。大阪府と隣接する府県で「震度5強」以上の地震が発生した場合において、大学支給のメールアドレスや各自で登録している専用アプリ、LINEアカウントに安否確認通知が一斉送信されます。

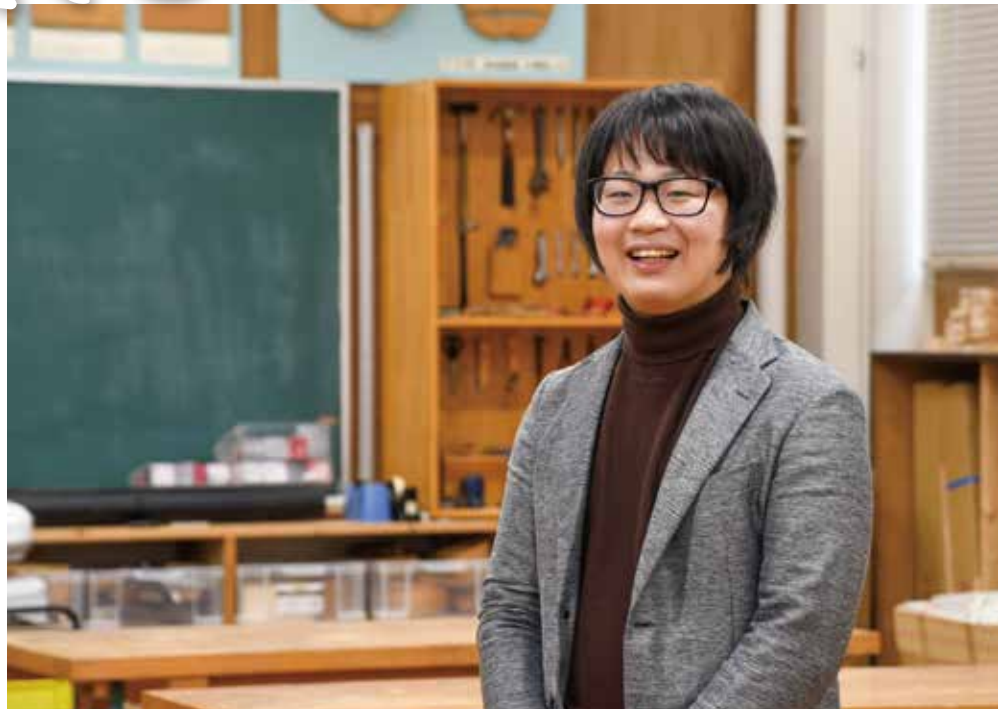


もしも…のとき

もしも、のときに誰もが必要な対応を迅速に行うためのツールや、大規模な地震発生時に構成員の安否確認を行うシステムの導入など、特色ある事業にも取り組んでいます。

連携

特色



一人ひとりの個性を引き出す技術科教員に

学校教育教員養成課程
中等教育専攻技術教育コース4回生

なか むら たく と
中村 拓人さん (大阪府立佐野高等学校卒)

「小さい頃から物を作ったり、音楽、図工などのクリエイティブなことをしたりするのがすごく好きでした」と話すのは中村拓人さん。「クリエイティブなことをするときって、参考となる本を読んだり、頭の中で考えたりするのに国語や数学のような能力も必要で、自然と勉強が身につきました」と言います。

ピアノを習っていた中村さんは、最初は音楽の先生になりたかったそうですが、中学生の頃に、ある技術の先生に出会ったことで、技術の先生をめざし始めます。「その先生は学校の備品を自作してしまう程に創作活動に長けた方で、とても生き生きしていました。そんな姿を見て、こんな大人になりたい、と思いました」

将来の仕事を決めた後、本学を志望校に選んだ理由は、オープンキャンパスに訪れたときに触れた先輩や教員の『人のよさ』だと、中村さんは言い切ります。「どんな質問にも寄り添ってくれる先輩たち、1つの質問に対し数多くの答えを返してくれる先生方、同じ場所でこの人たちと学ぶことができればどうなるんだろう、とワクワクしました」

技術教育コースの魅力を聞くと、中村さんの口から言葉が溢れ出てきます。「定員が少ないからこそその濃密さがあります。先生も技術分野にも教育

分野にも精通された方ばかりで、1回生の授業では圧倒されました。専門科目では、木材加工・金属加工・情報・電気などの技術に関わるものに取り組み、作成したものへの評価を受けます。それと並行して、教え方の学習、学習指導案の作成などの教育的な実践も本格的に行います。ここまでどっぷり技術教育に浸れるのはここだけじゃないでしょうか!!」

卒業研究では、本学とPanasonic、東北大学とで共同で行っている、はんだ付け技術に革新を起こすような“新材料開発”に携わっている、とのこと。「基板に電子部品を実装する際、一般にははんだごてではんだを溶かす接合方法が用いられていますが、工業的にはペースト状のはんだを接合部に塗布して加熱することで接合する方法もあります。共同研究では、後者のペースト状はんだの材料開発を行っており、従来よりもより低い温度での接合をめざしています。特に僕は開発段階において見つかった課題の原因説明を担当している他、この開発中のペースト状はんだを中学校技術の授業で利用できないか検討しています」

卒業後は、介護等体験での経験を通じて、特別なニーズを持つ子どもたちを支援したいと思い、特別支援学校の技術科教員になることを目標に、

特別支援教育特別専攻科への進学準備を進めている中村さん。「介護等体験で担当していただいた先生が、子ども一人ひとりの個性を活かすために、どのような授業を展開していくのかを考えることを本当に楽しんでおられました。他の支援学校の先生からは、一人ひとりに向き合うことで、今まで見えなかったことが見えることが多々ある、とも聞きました。大学で学ぶことが本当に好きになったので、社会に出てからも、教えるだけでなく、その過程で学ぶことができる、そんな教員になりたいです」

中学校の頃の技術の先生が言っていた「前を向いても、後ろを向いても誇れる人でありなさい」という言葉を、今でも覚えているそう。「前を向いて子どもたちに教えているときも、後ろにいる部下や後輩を引っ張っているときも、ありがたい自分であられるような人間でありなさい、という意味だと思っていて、将来先生になったときにも心に持ち続けた言葉です」。ものづくりへの愛を溢れ出させながら、ありがたい自分を忘れない姿を表現することで、子どもたちの自分らしさを引き出す、そんな中村さんの姿が思い浮かびます。

人と人との繋がりを大切に

教育協働学科
芸術表現専攻美術表現コース4回生

にし むら こう すけ
西村 昂祐さん (神戸市立葺合高等学校卒)

「子どもの頃は絵を描くことが特に好きではなかったですし、図工の成績も平均か少し下ぐらいでした」と、美術表現コースの学生としては意外なエピソードを切り出したのは、西村昂祐さん。

そんな西村さんが、美術の世界に興味を持ったのは高校の頃だと言います。「周りが大学進学のことを考え始めていて、高校卒業後も勉強したいことは何だろうとなんとなく考えたとき、ふと、美術の勉強ってどんなことするんだろう、と考え始めました」。その後、元々興味のあった仏像や文化財の修復に携われる仕事に興味を持ち、そこから美術系の大学にも興味を持ち始めました。

本学を志望した理由を聞くと、「1、2回生の間は『絵画』『デザイン』『立体』を並行して学ぶので、自分のやりたいことに打ち込みながら他の分野の知識も得られるのがいいなと思いました。あと、美術とあまり関係のない様々な専攻がある中で学べるのも、美術系の大学と違っておもしろいなと感じました」と答えます。

西村さんは、写真の上に透明のフィルムをのせて、その上に絵の具を重ね、最後にキャンパスに転写するという技法を使って表現しています。これは、絵の具を転写することで偶発的な模様をつくる「デカルコマニー」という技法から着想を得た

もの。「1回生の頃から写真と絵の具を組み合わせることで表現したいと思い、写真サークルの活動に参加していた時期もありました。2回生のときに、デカルコマニーの技法も取り扱った授業の最後に出された課題で“何か新しいことをしたい”と思って今の技法に挑戦しました。最初は全く思い通りにいきませんでしたが、何回も何回も挑戦して、少しずつ思い描くものに近い表現ができるようになりました」

プロのアーティストを志す大学学部生・院生を対象に、返済義務の無い奨学金を給付し、若手アーティストを育成することを目的とした「三菱商事アート・ゲート・プログラム」に3回生のときに応募し、美術大学・芸術大学以外の大学の学部生として唯一奨学生に選ばれた西村さん。その奨学金を元手に、同じコースの先輩と一緒に、ある企画に取り組みます。それは、マンションの一部のスペースをギャラリーにリノベーションし、作品の展覧会を開こうというもの。「最初は大教生だけでしたが、他大学の美術を専攻している学生も集まって、地域の活性化に貢献できるような個展やグループ展を開くことができました」

西村さんは、学内外の様々な人と協力して開催したイベントやSNS、「三菱商事アート・ゲート・

プログラム」での作品発表を通じて、ギャラリーの管理人やコレクターに声をかけられ、東京をはじめ多くの場所で作品を出しています。「マンションでの企画もそうですが、本当に人と人との繋がりが大事だと思っています。お声がけいただいた場所で作品を出して、そこでまた違う人に声をかけてもらって、どんどん繋がっていくような、広がっていくような感じがあります」

話し方も佇まいも、落ち着いた印象を与える西村さん。趣味は魚釣りで、釣れなくても何も考えずに川を見たり、制作に行き詰まったときもボーっと散歩したりすることが好きだと言います。「その点から言うと、柏原キャンパスの自然は制作に集中できる環境とも言えるし、自然と発想が湧いてくる美術向きな場所ですね」

最後に卒業後のことを聞くと、「これからどんなことになるかはわかりませんが、制作は続けたいと思います」と、これまでと同じゆっくりとした口調で、西村さんはそう言いました。

授業探訪



大教生はどんな授業を受けているのか？
講義室をのぞいてみました。

大学院教育学研究科 プロジェクト演習B

土曜日の夕方、天王寺キャンパスのとある講義室では、3～6名のグループに分かれた院生たちが、活発に意見交換を行っていました。教育心理学部門の出相泰裕教授が、その様子を教壇から見守ります。各グループをよく見ると、20代から50代、私服の方やスーツの方まで、色々な世代の色々な立場の方々がいるようです。

今回訪れたのは、大学院教育学研究科教育ファシリテーションコースの授業「プロジェクト演習B」。前回の授業で、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えるために、様々な地域住民等の参画を得て、地域と学校が連携・協働して行う『地域学校協働活動』について学んだ院生たち。今回は、どういったことを学ぶのでしょうか。

「それでは、今グループで話し合ってもらった、地域の人が関わった教育経験を発表してください」と呼びかけます。各グループからは、地域の特産品や名産品などの産業に触れる取組や、地域住民と一緒にいる避難訓練、地域の祭りの景品づくり、プロの方による部活動指導、市民体育大会での交流など、様々な経験談が発表されます。発表後、出相教授は「専門職の方だけでなく、地域には子どもの好奇心を刺激できる多才な方もいらっしゃいますので、そういう方と教育を上手くマッチさせるようなコーディネーターも重要になってきます」と補足します。続けて、文部科学省の方針や、中央教育審議会の答申に沿って地域学校協働活動の重要性を紹介しました。

「これから、自分が学校側にゲスト講師として呼ばれたと想定し、自分がやってみたい授業案をグループで出し合ってみてください」と院生たちに投げかけます。様々なバックグラウンドやキャリアを持っている院生が通っているからこそ、授業では院生同士で良い化学反応が起きるように意識しているのだと、出相教授は言います。

グループワーク開始の合図で、院生たちは前のめりに話し始めます。地域教育を専攻するグループでは、「小学生が地域を巡って、自分たちの遠足プランを考えるのはどうですか？」「地域を巡って色々な町工場で何が作られているかリストを作る。そのリストをもとに、組み合わせて何かを新しく創造するっていうのは？」「農業でもできそう。同じようにリストを作って、お弁当を作る。それを友達同士で交換して、ランキングを作る」、アイデアとアイデアとが混ざり合っています。他のグループでも、「自分たちの自己満足にならないように、事前にどんなことをしたいか聞く」「〇〇ができない、とかのよろず相談を受けて、教えてもらえる地域の方をマッチングさせる」「防災マップを地域の人たちと一緒に作っていく」「地域の楽しい場所探し。ゲームとスマホが当たり前になっている世代には、逆に新鮮だと思う」と、次々とアイデアが出てきます。

「この授業の最終目標は、学校現場で実践できる『地域学校協働活動』を考案することです。今後は、途中から合同で受講する教職大学院生に授業案を提案し、現職の教員でもある教職大学院生の声を落とし込んでいきます。そうするこ

Explore the Class

教育心理学部門 出相泰裕教授



とで、授業案は実現可能性のより高いものにブラッシュアップされていきます。現場では、総合的な学習の時間などでの教員の負担を減らしながら、教育効果の高い授業を、どれだけ提案していくかが重要になっています。その実践を現場さながらに、キャンパス内の組織だけで取り組めるのも、このコースの魅力です」と出相教授は語ります。

院生たちは引き続き、教育現場と地域とが協働して子どもたちの育ちを支える重要性を学びながら、教職大学院生と協働で授業を作りあげることに、現場での実践力を磨いていきます。

大学院教育学研究科の
紹介はこちら



【授業DATA】

対象学年：大学院1年生
主な対象学生：教育学研究科高度教育支援開発専攻
教育ファシリテーションコース
開講期：2021年度後期 土曜5限

VISIT THE LAB



ラボ訪問



▶ スポーツ科学の力で現場を支える

「大学1年生のときに観に行った日本選手権水泳競技大会の会場で、“スポーツ科学との出会い”がありました」と生田泰志教授は話し始めます。「急遽、大会会場で先輩から頼まれて、観客席からスタートに合わせてボタンを押す手伝いをしました。そのボタンは、記録用のカメラにスタートのタイミングを知らせるためのものであることを後から知り、それが自分の『レース分析』の第一歩でした」。レース分析は、泳ぎの速さだけでなくピッチや泳ぎの大きさ、さらにはスタートやターン、あるいはゴールタッチを含むレース終盤に要した時間などのレース情報を計測し、それらをもとに選手のパフォーマンスを客観的に分析すること。選手やコーチは、この分析をもとに課題を見出し、今後の練習を組み立てていきます。生田教授はレース分析という“スポーツ科学との出会い”の後、修士課程修了までの学生生活で、選手として幾度となくレースに出場しながらも、レース後にはレース

分析の手伝いをしていたそうです。

その後、レース分析は日本水泳連盟科学委員会の一つのプロジェクトとなり現在まで続いています。修士課程修了後、本学に採用されてからは、国内で開催される水泳競技大会において、科学委員会が実施するプロジェクトのチーフとしてレース分析に注力します。1999年にはオーストラリアで開催されたパンパシフィック水泳選手権で、日本代表チームに帯同するスタッフのうち、初の科学分析スタッフとして選ばれます。以後数々の国内外の大会において、世界で戦うトップアスリートをスポーツ科学の力で支えていきます。

2000年、オーストラリアスポーツ研究所において、1年間の在外研究をしていた生田教授。研究所が中心となり立ち上げた、様々な国の研究者で構成されるレース分析プロジェクトの一員として、シドニーパラリンピックのレース分析に携わります。翌年、そこでの経験を活かした、日本身体障

害者水泳連盟の合宿での水泳指導をきっかけに、ジャパンパラリンピック大会のレース分析も行ようになります。当時は、パラ水泳日本代表選手の主な活動が関西圏中心であったことから、大学のゼミ生を連れて生田研究室として、レース分析に携わることも増えていきました。

長年にわたるレース分析の経験から、2021年に開催された東京パラリンピックでは、スポーツ科学の視点を踏まえた解説を期待されて、NHKの水泳競技解説者として抜擢されます。「手元でピッチ(手をかく速さ)と通過タイムを測るなど、放送席から収集できるレース情報を交えながら解説を行うことを意識しました。『速い』『遅い』という主観的な解説ではなく、予選よりも何秒早い、といった数値情報を使った客観的な解説を心がけました」。この姿勢には、日本代表選手たちは科学情報を使いながら世界と戦っていることを発信したいという、スポーツアナリストならではの熱い思いが込められていました。

「スポーツ科学やその情報は一つのツールで、必要な人にとっては大変重要なもの。レース分析が即座にフィードバックができず、現場で十分に活用できなかった時代から、今や活用しないと勝てない時代になっています。つまり、スポーツ科学を活用することが“当たり前”になってきたのです。その変遷をそばで見てこれほど本当によかったと思います」。生田教授は懐かしげに語ります。

大学教員としては、授業を受ける水泳初心者から水泳部の上級者まで、スポーツアナリストとしては、健康者から障がい者まで、幅広い層の“泳ぎ”、さらには世界大会クラスのトップアスリートの“泳ぎ”を見てきたことが自らの強みだと言う生田教授。教育大学の教員として、これからは学校体育における初心者指導に役立つ仕組みづくりをしていきたいと言います。「水泳に限らず、何事も楽しさの一つに『上達する』ということがあると思います。全ての教員が、泳ぎが得意であったり、水泳の専門家であったりすれば良いのですが、実際はそうではありません。ですから、正しい泳ぎ方や、その教え方を伝えるための仕組みを開発することが必要であると思っています。これからは、『上達する』という水泳の楽しさを追求し、水泳界や教育界に貢献できる“Something New”をつかっていきたいです」



表現活動教育系 (スポーツ科学部門)

生田 泰志 教授

IKUTA YASUSHI





01 プロジェクションマッピングと連動！学生が狭山池博物館でコンサート



教育協働学科芸術表現専攻音楽表現コースの学生6名が、10月24日(日)に大阪府立狭山池博物館でオータムコンサートを開催しました。

これは、出演した学生らのうち4名の学生が、教育コラボレーション演習の一環で、同博物館にて実習したことをきっかけに、開催に至ったものです。

コンサートでは、演奏だけでなく、ディズニーキャラクターにちなんだ装飾を身につけて「ディズニーメドレー」を披露し、会場を大いに沸かせました。さらに、アンコール曲としては大ヒットアニメ『鬼滅の刃』の主題歌「紅蓮華」を演奏しました。

その後、夕方からは同施設内で実施された開館20周年記念事業のプロジェクションマッピングイベントにも出演し、コンサートで披露した曲目の一部をプロジェクションマッピングに合わせて演奏しました。

02 学生がMinecraftの世界でキャンパス内の建物を再現

ICT教育支援ルームの学生が、11月1日(月)から3日(水)の3日間、「Minecraft: Education Edition※」を使って柏原キャンパス共通講義棟(A棟)を再現する様子をYouTube Live配信するイベントを実施しました。

これは、プログラミング教材である「Minecraft: Education Edition」の活用方法について、実際にプレイしながら解説することで、誰でも気軽にプログラミングを学ぶことができることを伝えることを目的に実施されたものです。

3日間の配信は、同ルーム11名の学生スタッフで運営し、延べ457名が視聴しました。さらに、専用アプリをインストールして学内ライセンスを用いることで、配信している同一のゲーム世界に参加できる視聴者参加型の形式で行いました。

※Minecraft: Education Editionは、ものづくりゲームの一種であるMinecraft(マインクラフト・略称「マイクラ」)を、プログラミング教育・情報教育・協同学習などの教材として使えるようにしたものです。



実際の写真



ゲーム画面



実際の写真



ゲーム画面



今回の表紙に登場してもらった男子バスケットボール部の学生3人に、「コロナが収まったらしたいこと」を聞いてみました。

⑤ 教育協働学科スポーツ科学専攻 4回生 原 未来斗さん

超満員のスタジアム、アリーナに足を運んで、色々なプロスポーツを観戦したい。スポーツ観戦でしか味わうことのできない興奮や感動を!!

④ 学校教育教員養成課程特別支援教育専攻 2回生 森本 菜月さん
海外を旅行し、世界のいろんな場所を見て、いろんな人と交流したい!

⑥ 教育協働学科スポーツ科学専攻 4回生 加藤 丈寛さん

アメリカへ行き、異文化に触れ自分の成長に繋がりたい。NBAを生で見ただけでなく、日本とアメリカの取組の違いなども勉強したい。

修学支援事業基金へのご協力について

新型コロナウイルス感染症拡大の影響による経済的に困窮する学生の存在は深刻です。本学では早期に、学生が経済的な理由により修学を断念することなく、安心して学業に専念できるよう、大阪教育大学修学支援事業基金を活用し、「緊急学生支援金」給付を実施しましたが、今後も新たな対象学生の増加や、継続支援とともに新たな支援の必要も予想されます。ご協力をよろしくお願い申し上げます。

一口
1000円

クレジットカード等によるインターネットでのお手続きとなります

●基金の詳細についてはこちらから▶

大学ホームページ 基金ページ

https://osaka-kyoiku.ac.jp/university/somu/oku_foundation/forstudent2.html



●ご協力いただける場合は

上記ページのこちらのボタンから▶

(寄附)基金寄附支払いシステムF-REGI

※所得税の「税額控除」の対象です。

インターネットでの申込

「天遊」とは

「天遊」とは荘子の言葉で、人間の心の中に自然に備わっている余裕を表しています。キャンパス統合移転の記念碑に銘文として刻まれており、揮毫は故水嶋昌(山耀)本学名誉教授によるものです。「天遊」の読みからとった「TenYou」は、「十人十色、その中のあなた」というメッセージを込めています。

